
さらば男ども【連載休止】

鈍行彗星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さらば男ども【連載休止】

【Nコード】

N5523J

【作者名】

鈍行彗星

【あらすじ】

遠くない未来、男と女はとんでもない別居生活を営んでいた。女は宇宙に浮かぶ楽園・人工衛星要塞「パラダイス」に。男は荒廃し続ける地球に。女達は、男達の抹殺を企てていた……………（5 / 29
現在、連載休止中…）

1・女達の奇襲（前書き）

パラダイス王家の王女レクアとサホリは、男達を狙撃することを娯楽としていた。レクアとサホリの戦闘機に、地球の青年ダグラスは無謀にも立ち向かう…！

1・女達の奇襲

ゲンゾウ「そうか．．．ミサが死んだか．．．」
ハルゾウ「よくがんばってくれたよ．．．俺達の為は何十年も．．．」

風の吹く湿った丘の上に、一人の美しい女が眠っていた。

ダグラス「なあドナルド、ミサが死んじまったよ。お前も上から見てるんだよな？ ああ忘れないさ、お前らが好きだった桜の実を」
穴の空いた竹筒を左手に握った青年が、女の手には赤い桜の実を一つずつ握らせ、雫を落とす。

その日、黒い雲に覆われていたのは空だけではなかったのだ。

行き過ぎた男女差別撤廃はいつしか、女性優遇の社会を築きあげるといふ事になり、世界中の男達は次々に行き場を失っていった。そして百五十年前、ついには男達は取り残されてしまったのだ。

《人工衛星要塞『パラダイス』 女性だけが暮らす最も美しい、最も理想の世界 と、天の女達は言う。》

《人工衛星要塞『パラダイス』 血も涙もない、冷酷な女たちが暮らすこの世で一番醜いところ と、地の男達は言う。》

いずれにせよ、男を捨てた女達の新境地を比喻する言葉である事に変わりはない。

そう。人間は地球と宇宙という、とんでもなく離れた別居生活を営んでいたのだ。

女を失った男達に残されていたのは荒廃し続ける地球と、滅亡への道のりだけだった。

だがパラダイスの女性の中には、ノアと呼ばれる男性共存派が少なからず存在していた。

しかし、そういった女性はパラダイス政府から危険分子とみなされ、暗殺、もしくは冤罪を着せることによってその数を減らされてきていたのだが、パラダイス創立百五十年が過ぎようとしている現在も地球の男達が滅んでいない所から考えて、密かに地球へ降りている女性がいることも事実であり、その完全な処理はできていないらしい。いや、むしろ王族や政府といった機関にも、そういった思想を持つ仲間がいるのではないかという噂さえあった。

更にその一方、反男性過激派による男達への虐殺行為というものが存在していることもまた、確かな事実であった。

ハルキ「にーちゃん、にーちゃん」

ハルオ「ん？ どうしたハルキ．．．!!!?」

海岸で体を洗っていたハルオは、海からこちらに向かってくる黒い点を見て鳥肌が立った。急いで弟にボロ布を着せて抱えると、一目散に林の中へと駆け込んでいった。

ハルオ「ダグラアアスっ、女達だッ！女が来たぞおおッ！！！！！」

反男性過激派は政府や王族に支持され、教育方針もその意向で進められてきていた。特に最近では王女三姉妹の姉二人が熱心で、暇を見つけては地球へ降り、娯楽のように男達の射殺を楽しんでいた。今飛んでいる小型ジェットは、まさにそれなのである。

サホリ「みいつけ！ レクアお姉様、林に男の姉妹が逃げたの見えただかしらー！」

レクア「補足済み。追いかけるわよ」

緩やかな円を描きながら旋回する小型機から、左の方へ黄色い途切れ途切れの光が飛び出した。その光は廃墟の家の屋根を貫き、小さな雲を起こす。こんどは右側へも同様の光が飛び出しはじめ、こちらには明らかに林の中を動くある物体を狙っていた。

ハルオ「クソっ!? 女どもめよくも．．．ッ」

木々に光がかする音、あるいはめり込む音が、ハルキを抱えて走

るハルオのすぐ後で響いていた。段々、音が前の方へ近づいて来ている。

と、突然ハルオは木々の中に消え、その直後、切れ切れの黄色い光も飛んでこなくなつて、小型機はその場から離れていった。

ダグラス「大丈夫かハルオ、ハルキ？」

ハルオ「ああ．．．助かつたよダグラス。それにしても．．．」

木々の陰に、半径・深さ一m程度の穴があり、そこに三人の男達が頭を低くして隠れていた。ダグラスと呼ばれた男はハルオと違い、短い髪は薄い木茶色で、瞳は海のように蒼い。歳も十は上だった。

ダグラス「今に始まつたことじゃない、もう近くの集落はほとんどやられたらしい。ここもいつかは来ると思つてたが．．．」

まだ小さなハルキは、ハルオにしがみついて不安そうにダグラスを見ていた。ダグラスもそれに気付いて、ハルキの頭を優しく撫でてやると、立ち上がつて外の様子を確認した。

ダグラス「とにかくみんなに知らせに行こう。あいつらはまた来るに決まつてる！」

だが既に遅かつた。ハルオ達が集落に戻つてきた時にはもう、小型機は集落の男達をほとんど撃ち抜き終えていた。

ダグラス「ああ．．．っ」

ひっくり返る飯ごう、崩れたビル、そして血を流す男達。

ハルキを抱えていたダグラスは、止めようのない怒りで溢れそうになつていた。

と、その時。二人の男がハルオ達のいる林に向かって走つてきているのが見えた。

ダグラス「ジイさんっ、おやっさん!？」

ゲンゾウ「三人とも逃げろ! あいつはワシらを」

ハルオ「オヤジツ伏せるおツ!!!!!!？」

小型機はハルオ達の頭を通り過ぎて、また旋回しようとしている。三人はゲンゾウ達の所へ駆け寄つた。

ダグラス「大丈夫がジイさんおやつさん!!?」

ゲンゾウ「だ、大丈夫だこのくらい．．．ッつつ、」

ハルオ「オヤジ．．!? 足にやられてるじゃないか!!?」

ハルキ「じいちゃん．．!!?」

サホリ「レークアー、今の見たあ?」

レクア「ええ．．あれで最後のようね．．．」

小型機の中の王女二人は、最後の目標めがけて旋回・照準を合わせていた。ゲンゾウ達が、照準機の赤い円の中に一人ずつ収まってい．．．

ダグラス「んノお．．っ、もう許せねエツっ!!!!!!!!」

ダグラスは突然林から飛び出して、広場の真ん中辺りまで来ると、キツと小型機に向かって振り返った。小型機はゲンゾウ達から向きを変えて、ダグラスに照準を合わせようとしていた。

レクア「愚かね、自ら死を選ぶなんて．．．」

サホリ「いったください!!」

ゲンゾウ「何をしてるダグラス?! 死ぬ気かツ!!?」

ダグラスは足下に落ちていた石を拾い、小型機に向かって走り出した。小型機は高度を下げ、確実にダグラスに向かってきている。

ダグラス「うおおおおおおお!!!!!!!!!!」

大きく振りかぶったダグラスは、ありったけの力を込めて石を投げた。石は矢のように、あるいは空へ舞い上がるツバメのように鋭く、そして速く飛んでいく。

そしてそれは、見事に小型機のフロントガラスを貫き、大粒のガラスの雨を降らせた。

サホリ「やあぁーッ!!? なになになににッ!!!!!!?」

レクア「落ち着きなさい! 落ち着きなさいッ、サホリ!!!! ガラスがただ割れただけでしょうがっ!!!!」

だがダグラスの放った一撃は致命的だった。ガラスが割れたこと
によって外気が室中に入り込み、マスクやスーツを着ていたとは
いえ強烈な圧力が二人の体を襲った。特に前部席に座っていたサホ
リには、文字通り潰されそうになるほどのGが掛かっていた。失神
してもおかしくない。

レクア（ツ．．．これじゃ宇宙に戻れない、脱出するしかないか
．．！）

ぶしゅう、と蒸気が噴出す音がして、レクアとサホリはその体を
空に浮かした。小型機は自動操縦のまま内陸のほうへ向かっていき、
数分もしないうちにただの点になっていった。

ハルオ「すげえっ！すげえよダグラス！！！」

ハルキ「スゲー」

ハルオもハルキも、ダグラスの勇氣ある行動に感動して無心に手
を叩いていた。当のダグラスはまだ怖い顔をしていて、小型機から
飛び出した二つの影を睨んでいた。

ダグラス「まだだ、あいつらは地上に降りてきてる。ハルオ、ゲン
ゾウじいさんを頼む！」

ハルオ「えっ！？ま、待ってよ！一人じゃ危ないって！！ダ
グラスってばー！！！」

ハルオが答える前に、ダグラスは走りだしていた。武器も道具も、
ダグラスは何も持っていない。

それでもダグラスは、女達に戦いを挑みに行く。仲間達の敵を討
つため……自らの怒りを、ぶつけるために。

これは、男と女の闘いの物語

生き残るのは……どっちだ

（つづく）

1・女達の奇襲（後書き）

遅くなりましたが、次回の更新は2/13の予定です。

2・レクア（前書き）

地上の男達を奇襲した小型機は、ダグラスが投げた石によって墜落し、ダグラスはその現場へと向かった。そこでダグラスが見たのは、初めて見る『少女』という人間だった……。

2・レクア

2

レクア（ここが地上…空気はそんなに臭くない……………）

そこはちょうどかつてのビル郡の端、土が所々でむき出しているコンクリート道路の上だった。サホリは恐怖とGのせいか、気を失って横向きに倒れている。

レクアはサホリのマスクを外して、息がしやすいように首の向きを動かしてやっていた。

レクア（……………来たわね）

ダグラスが、サホリ達の近くまでやってきていた。二十m程距離を取って、ビルの陰から様子を伺っている。

レクアは小石の碎ける音を聞いてそのことに気がついていたが、おもむろに立ち上がると気付いていない素振を見せながら、ゆっくりとマスクを外した。

結んでいた髪もほどき、マジョーラカラーの長髪をなびかせるように広げている。

ダグラス（……………?!）

ダグラスにとって、それは初めて見ることばかりだった。

白赤青に変化する色の髪、透き通るように白い肌、そしてグレーのスーツがそのままかたどっている、明らかに自分とは異なるメリハリのある体つき……………。

それは生まれて初めて見る、少女と区分される人間の姿だった。

ダグラス「何なんだ……………」

レクア「コソコソしていません、出てきたらどう?」

レクアは、ダグラスの隠れているビルの方を向いていた。右手には、銃を持っている。

しまった、と思ったが、ここで引き下がるわけにもいかず、奥歯

を強く噛み締め、ダグラスは思い切つてレクアの前へと姿を現した。
レクア「！」

レクアにとつても、ダグラス 少年と区分される人間を、
こんなに間近で見るのは初めてだった。

茶色いくせつ毛の髪、同じ白い肌でも少し日に焼けた色は暗く、
もう何年も着続けているのであろう

、文字や絵の消えかけたボロボロの半袖と半ズボン。

ある意味では耐え難い、ある意味では興味深い存在が、そこには
いた。

ダグラス「よくも仲間を殺してくれたな！」

レクア「あなた達はいずれ滅び行く運命…それを少し楽しみながら
早めさせてもらっただけよ」

ダグラス「なんだとおツ?!?!?」

一歩近づくとダグラス、それに銃を向けるレクア。

レクア「あなた、これが何か知つてて？」

ここから飛び出る弾に当れば、あなたもお仲間のように血
を吐いて死ねる。それ以上近づかないでもら…。」

しかしダグラスは止まらなかった。それどころか、銃が見えてい
ないかのように、ズカズカとレクアに近づいてきている。

レクア「止まりなさい! 止まらないと、撃ちますよ!！」

しかし、ダグラスは臆さなかった。まさか本当に止まらなと思
わず、レクアは焦つて引き金を引こうとした。

それより早く、ダグラスはレクアの銃を持っている方の手を払い、
そのままレクアの顔を殴っていた。不意打ちを受けたレクアの体は
浮かび、持っていた銃はカラカラと音をたてて転がっていった。

レクア「ぐっ…!」

ダグラス「おまえらはそれでも人間か?!? 同じ人間を殺して…
…おまえらは何も感じないのかツ?!?!?」

上半身だけ起こし、左手で頬を隠すレクア。何も言わなかったが、
いや、何か言いたくても口が動かなかつたのだが、それでも右目は

ダグラスの顔を睨んでいた。

殴った瞬間こそ快感に思えたダグラスだが、今になって理由不明の不快感が襲い、どうも気分が悪い。

だからダグラスも、レクアを強く睨み返すことしかできずにいた。ダグラス「……………」

レクア「……………」

しばらくの沈黙が続いた。レクアは小刻みに目と手を動かして、ダグラスはほとんど不動のまま、時々違う方向に目を向けながら次の言葉を考えていた。

ダグラス「おまえらが……………」

そのとき、ダグラスの服に

穴が開いた。

小さな小さな、親指よりも小さい穴が、一つ……………」

倒れるダグラス、振り向くレクア。

そこには、さっきダグラスに弾かれた銃を震える両手で構える、サホリがいた。

レクア「…サホリ？」

サホリ「あは…はは…は…は……………は……………は……………やっちゃ…たよ…レクア……………」

サホリの眼鏡は左のレンズが割れていて、目のすぐ下の切傷からは血が流れていた。それはちょうど涙のようになって、首の所で雫になり、グレーのパイロットスーツにしたたれ落ちていた。

レクアは立ち上がり、サホリの傍へ歩いてくると、サホリの手を取って囁いた。

レクア「よくやったわサホリ……………ありがとう」

サホリ「はは…はは…はは…はは……………や、やっぱり、間近でやると違うね……………」

レクア達は携帯電話のような物で連絡を取って、手配した帰りの飛行機の到着を待っていた。たとえ男達がいる危険な地上とはいえ、さすがの政府も王女二人を見殺しにするわけにはできないというわけだ。

サホリ「ねー．．．ここじゃなきゃダメなの？ 死体のそばにいるなんてあたしやだよ．．．」

レクア「我慢しなさい。下手に動いたら、また死に損ないの男に襲われるかもしれないでしょう？」

二人とも顔にケガをしていたが、さほど傷などはひどくなかった。レクアは頬が少し腫れる程度で、幸い歯も抜けていなかった。

サホリ「あゝあ．．．こんなことなら殺さなきゃよかったなあ．．．」

「．．．うう．．．．．」

ぎよつとしたのはサホリだけでなく、レクアもだった。死んだと思っていたダグラスが、今、小さなうめき声を上げて体を動かしたのだ。

サホリ「うそ．．．っ!？」

レクアは立ち上がり、ダグラスの頭の前に立って銃を取り出した。そして、それをダグラスの頭に向けて構える。

サホリ「や．．．やるの？」

レクア「仕方ないでしょう？ 生かす意味がないもの」

レクアが引き金に人差し指を絡めた、その時だった。

ダグラス「．．．ドナルド．．．ミサ．．．」

レクア「．．．ミサ？」

ふと、レクアはダグラスの首に黄色く光る紐のような物がついていることに気がついて、銃を向けたまま、紐に手を伸ばした。

それは細い金属が連なったもので、長さは胸の辺りまであり、あ
る物と繋がっていた。

レクア「ロケット?」

メイドインパラダイス。

それは地上で手に入るはずのない、パラダイス製の刻印が刻まれ
た、写真を入れるロケットだった。本体には、一発の銃弾がめり込
んでいる。

レクア「ふうん、運のいい奴ね・・・」

レクアはロケットを開き、砕けた透明プラスチックをどかして、
中の写真を見た。そこには、すっかりとした服装をした男が、小さ
な子供を抱えている姿の写真が収まっていた。右側の切れ目の近く、
大人の男の隣には誰かの肩が映っていて、どうやらもう一人本当は
横に映っていたらしいことがわかる。

レクアはそれを閉じると静かに微笑し、サホリの方を向いて意外
なことを言った。

レクア「この男をパラダイスへ持って帰りましょう、サホリ」

サホリ「ええーッ!? なんてなんでなんでなァンデえっ!!!
?」

サホリは我が耳を疑った。この地上へ『男狩り』をするために降
りてきたのに、なぜ男を持ち帰らなければいけないのか、わからな
かった。

レクア「このロケットはパラダイス製よ。つまり、こいつを調べれ
ば、男達と接触していた『ノア』の手がかりが掴めるかもしれない」
サホリ「で、でもお・・・」

風が吹いてきた、いや、風が降りてきた。スペース・シャトル型
の機体は、下方向にすさまじい風を起こしながら垂直に降りてきて、
レクア達のいるコンクリート道路の上にその体を座らせた。お迎え
が到着したようだ。

レクア「私がうまく言っておくわ。サホリ、『ノア』はみんなの敵
なのよ」

そう言つと、レクアは降りてきた戦闘服の女達にロケットを見せながら状況を説明していた。女たちは少し戸惑った様子を見せたものの、レクアの命令に従つて、ダグラスをシャトルに運び入れていった。

シャトルは、再び強い風を下方方向に吹きつけながら、垂直に宇宙へと飛び上がっていった。

つづく…

2・レクア(後書き)

次回は、3月3日頃に更新します。

3・ミサと、ノア

3

ゲンゾウ「あーッダダ！もつと優しく巻かんかハルオ！！！」

ハルオ「あ……ごめん、じいちゃん」

ハルゾウ「しかし、よくそんな物が見つけれられたな。包帯なんかみんな服に変わっていたと思ったが……」

ハルオ「ダグラスが隠していたのを思い出したんだ。使えそうな道具とかよく集めてたし」

ハルキ「……………」

ダグラスがいなくなつてから一日が経っていた。ゲンゾウじいさんの外傷は、弾丸のかすり傷だけだったが、転んだ時のねんざの痛みが激しく、ハルオが包帯で足首を固定しているところだった。

ハルオ「これでよし……………」と。じいちゃん、歩きづらいとは思いつけど外さないですよ」

昼下がりの崩れたビル群、その日陰でひっそりと魚の干物をかじる男達が四人。遠くで波の崩れる音がするだけで、実に静かだった。このビル群は女達の奇襲以前から崩れていた物で、かつては都市としての役割を持っていた物だった。

ハルオ「…ダグラス、大丈夫かな……………あれつきり戻ってこないけど……………」

ゲンゾウ「なに、ダグラスのことだ。そのうち何も無かつたような顔をして帰ってくるだろう。ワシらが心配することあ無い」

ハルゾウ「だといいいんだが。あれで結構、ツメが甘い所があるからな……………」

ビルの上で、黒い影がグルグル回っていた。人間よりもしぶとく多く生き残ったカラス達が、干物や、男達の死体を狙っているのだ。

ハルオ「……………女つて、男を食つたりしないよなあ……」

ゲンゾウ「何をバカなことを言つておるんだ、女というのはもう一つの人間だと教えたじゃろうが！」

ハルゾウ「バケモノじゃあるまいし……………ミサのことを忘れたのか？」

ハルオ「あ……」

ミサと言うのは、ハルオ、ハルキ、ダグラスの三人の産みの母親である。また、ハルゾウとダグラスの父、ドナルドの妻でもあった。

パラダイスから地上へ降り、男達の滅亡を防ごうと暗躍していた、男性共存派『ノア』の一人だった。その彼女も地上で病に倒れ、パラダイスへ帰ることな亡くなった。本人が、それを拒んだのだ。

それを機に、不定期に地上へと降りていた他のノアの女達は、滅多に地上へと降りなくなつてきていた。せいぜい、物資の入つた無人シャトルを、海上へ落下させる程度だった。

その戻つたノアのメンバーも、数名がパラダイス内で行方不明になつていることを、男達は知らなかった。

ゲンゾウ「その通りだ。男も女も両方同じ人間。どちらかを下に置くことも、どちらかを上に置くことも、本来は許されないことだ。

じゃが、女達は過去の男達の横暴さの復讐と言つて、我々男にこのような仕打ちをしているのだ。

確かに、悪いのは長い歴史の中で、女達を卑しくも見下してきた男達だったのかもしれない。じゃが、だからと言

つて、果たして女を上によかつたのだろうか？

男を下に置きなおせば、全てが丸く収まるのだろうか？

いや、ワシはそうは思わん。男と女は同じ高さで共に生きるべきなのだ。長い時間が掛かるじゃろうが、いつか、男と女は性の別の枠を越え、分かち合うことができる。

……………そう女達の中で唱えていた女こそが、おまえ達の母であるミサだったのだ……………」

ゲンゾウはハルキの頭を撫で、更に続けた。

ゲンゾウ「その証拠に、彼女は自らの子供をパラダイスへ連れて行った。ドナルドとの間にできたあの女の子を……」

ハルオ「女の子!? ドナルドおじさんとの、ってことは……」

ゲンゾウは小さくうなずき、おもむろに口を開けて、こう答えた。
ゲンゾウ「そう……・・・ダグラスの妹、つまり女の弟だ。」

そしてダグラスは、突然変異で産まれた、女同士の間
に産まれた子供……とミサは言っていた。……おかしなことだ、産ま
れるはずのない男が女の世界で産まれ、絶望に浸っていた男達の前
に舞い降りた天使は、女を産んだ。」

ハルオ「だったらどうしてダグラスは地上に？ それに、その女の
子はなんで地上に残らなかったのさ？」

ゲンゾウ「……、それはダグラスが男だったからだ。」

ミサは元々パラダイス王家の血を引いていて、子供は世
継ぎ候補でもあり、当然女の子が生まれることが期待されていた。

じゃが、どういう訳か、『ダグラス』という男の子が産
まれてしまった。

不吉だ、祟りだと言われ、ミサは泣く泣くその子供を殺
さざるをえなくなった。

しかし、ミサは自分の体から生まれてきた子供を殺すこ
とができなかった。

そこでミサは、王族には内緒で地球へと降り、わしらの
元に現われたのじゃ。

どうかこの子を育ててほしい、とな………」

ハルゾウ「……………」

ゲンゾウ「それ以来、ミサは『ノア』と呼ばれる仲間達と手を組み、
時々地上へ降りてきては、ワシ達に食料や衣類を届けてくれるよう
になった。」

そしてそれから更に四年後、ミサはダグラスの育ての父
となったドナルドと恋に落ち、女の子を出産した。……………その子の

名前はわからんが、パラダイスへと連れ帰られ、パラダイスで産まれたことにされておる。

今ではきつと、王族が心待ちにしていた世継ぎとして育てられておるのじゃろう。………だが、結局ミサが女の子を産めたのは、その子が最初で最後じゃったそうだ。……。

だが彼女もこれでよかったと言っていた。男と女の間産まれたこの子ならば、男女を

繋ぐ掛け橋になれるであろうと………」

ハルゾウも所々に初耳な所があり、真剣な顔をしてゲンゾウの話聞いていた。ようやく一息をついたゲンゾウは、ハルキが用意してくれていた水をぐいっと飲み干した。

ハルオ「なあじいちゃん、よくわかったけど………よくわかったけど、一つだけわからないことがあるんだ。」

ゲンゾウ「何だ？」

ゲンゾウは少し体を前かがみにして、ハルオの言葉を待った。

ハルオ「恋に落ちるって、どこの穴のこと？」

一方、ダグラスを連れて帰ったパラダイスでは、言うまでもなく、あちこちで大騒ぎとなっていた。

レクアとサホリのジェット機が地球に墜落したことは既に報道されていたので、その二人が生還しただけでも民衆の関心は高かった。レクア「報道規制？ とんでもない、大々的に報じなさいな。レクア・パラダリシアとサホリ・パラダリシアは地球の男を生け捕りにし、男性共存派『ノア』を壊滅させる手がかりを握った、と」

レクアの後では、眼鏡を割られたサホリと、木箱の中に無造作に『詰め込まれた』ダグラスが台車で運ばれていた。

報道者「それは具体的にはどのような物なんでしょうか？」

レクア「近いうちに記者会見を開くことになるでしょう。その時にお話致します。わたくし、今はシャワーを浴びたいの。そこを通してくださるかしら？」

報道陣を衛兵達が脇に押さえられる中を、レクアは悠々と歩いていった。宇宙空港と宮殿は隣接して作られていて、ドーム状に覆われた専用の動く歩道で直結されていた。

セイカ「お姉さま！ 地球から男を持ってきたというのは本当なんですか！？ 私には理解できません！！！」

自室に戻るなり、早速妹の第三王女セイカから電話が掛かってきた。レクアは戦闘服を脱ぎながら、インターホンでセイカに応じていた。いつもは侍女達が着替えを手伝ってくれていたが、レクアはそれを断っていた。

レクア「『ノア』を一気に崩壊させるチャンスなのよ、セイカ。あの男は、メイドインパライスのロケットを持っていた。今まであやふやだった、地上へ降りて、男達と接触していた奴らが居るっていう証拠。」

それにその男を問いただせば、私達の知らない事の一つや二つ話し出すかもしれないでしょう？」

下着姿になったレクアは、大鏡に向かって左の頬を見ていた。冷やして薬を塗ってもらったりしていたが、やはりまだ腫れていて、少しだけ気になる。

セイカ「しかし……いくらお母様のカタキとはいえ、なぜ『ノア』にそこまで固執するんですか！？ 私は
レクア「セイカ。あなたは私と母が違うからそんなことが言えるのよ」

インターホンの電源を切ると、レクアはタンスの一番上を開けてタオルを取り出した。タンスを閉めた時、上に置いてあった小さな銀色の写真立てが倒れ、レクアはそれを直した。

写真には赤ん坊のレクアとその母が映っており、幸せそうに微笑んでいた。

レクア「待っててねママ……………ノアも、男も、必ず消し去ってみせるから……………」

下着を脱ぐとレクアは髪を広げ、シャワー室へと入っていった。

つづく……

3・ミサと、ノア（後書き）

次回は、3/23公開予定

4・拷問

パラダリシア城家内、謁見の間。

ベルーナ妃は大変不機嫌そうに三つの顔を見比べていた。両腕を組んで、朝に捨て忘れてしまった生ゴミでも見ているかのような目つきである。

ベルーナ「どういふことか、説明してくれるのでしょうかねえ、レクア？」

レクア「説明するまでも無いかと思いますが、お義母様。見ての通り、地上の男を一匹持ち帰ってきたのです」

サホリ「うん…まあ、そゆこと……」

サホリは左目に包帯を巻いた痛々しい姿で、レクアは左頬のアザを隠しめせず、ベルーナ妃に答えた。

そしてその男、ダグラスは両手を手錠で繋がれ、膝は地面につき、顔は下を向いていた。着替えを終えた、絢爛豪華な洋服に身をまとったレクア、サホリと並んでいると、まさにボロキレのような破れかけの服を着たダグラスは、周りの衛兵の女達の視線を集めていたに違いない。

ベルーナ「そのようなことを聞いているではありません。あなた達は、なぜこんな薄汚い男を連れて帰ってきたのです？ 政府も民衆も、多くの注目を集めています。ノアでさえ黙っていないでしょう。あなた達は自分が何をしたのか、わかつているのですか？」

レクア「無論、わたくし達も何の考えも無しにこのようなことは致しません。この男は男性共存派ノアに関する大変興味深い物を持っていましたので、拷問でもすれば有益な情報を口にするのではないかと考えた次第です」

レクアは、薄黄色をした丸い金属を取り出した。銀色をした鎖状の紐がついているそれは、写真を
入れるポケットだった。

ベルーナ「これがどうしたと言うのです。旧世紀の遺物を、その男が拾っただけなのは」

レクア「ここに、メイド・イン・パラダイスの刻印があります。旧世紀の国家に、パラダイスという名の国は存在していません。これはこの場所、人工衛星女帝国家・パラダイスで作られたものです」

ベルーナ妃は、やはり不機嫌そうな表情のまま、レクアの説明に耳を傾けていた。

セイカ「野蛮よ……どうしてお姉様方は、あんな娯楽を楽しむことができるのかしら！」

パラダイス第三王女のセイカは、姉二人と違って『男シューティングゲーム《ぎやくさつ》』に興味を持てなかった。一度、そんなゲームをサホリと一緒にやらされたことがあったが、気分が悪くなるだけで、面白くも何とも感じなかったのだ。

肘をつき、頬杖をかいて窓を眺めて溜息をつくセイカの姿を、親衛隊長のエレノアは近い場所からじっと見ていた。

エレノア「男どもは、生ゴミにたかるハエやゴキブリと同等の存在です。そんな害虫を殺すことに快感を感じるのは、致し方無いかと」
セイカ「そういう事を言ってる訳じゃないの、エリー。私は男だろうとゴキブリだろうと、生きている物を殺して楽しんでるのが理解できないの。たとえ撃たれるのが、その……男どもだろうと。男どもだって、生き物なんでしょう？」

エレノア「仰りたいことはよく分ります。ですが、あまりそのような事はお口になさらぬように。お妃様やレクアお嬢様に何を言われるやら、『ノア』に目をつけられるやもしれません」

エレノアは無表情に、しかし、セイカのことを考えながら答えていた。

セイカ「……わかってる。だからこうやって、あなたに愚痴を言

っているのにつ」

不意に、エレノアを呼ぶ声がした。親衛隊の女がやってきて、セイカに一礼するとエレノアの耳元で何かを囁いていた。

エレノア「……………そうか。わかった、今すぐに行く。セイカ様、わたくしはこれで失礼致します」

エレノアはその長い金髪を揺らして部屋の外へ消えていった。セイカは再び窓の外を見ながら、エレノアと同じ色をした長い髪をいじくっていた。

セイカ「……………ほんと、レクアお姉様はよくわからないわ……………」

地下拷問室。

その用途は多岐に渡り、使用頻度は多い。犯罪に対する取調べはパラダイス警察が行ってはいいるが、公にできない汚職、政治的犯罪者……………男性共存派に対する尋問は、しばしばこの場所で行われてきた。

しかし、本物の男性がここで尋問を受けるのは、パラダイス史上初めてだったの言うまでもない。

エレノア「……………どうだ、様子は」

女兵「いえ……………有益な物は特に。ロケットの件も、『ゲンゾウジイサン』にもらったの一点張りです」

ダグラスは手錠を掛けられ天井から吊るされていたが、服は自分の物を着せられたままだった。誰も、忌み嫌って触れようとしないからだ。

顔は腫れ、鼻や口からは血が垂れ、手首や足など肌が露出している所にもあざがいくつかできているらしかった。

エレノア「醜いな……………それになんという臭いだ。男とはこうもくさい生き物だったとはな」

エレノアは拷問を行っていた二人の女兵を制して、ダグラスへと近づいていった。火あぶりもされたのか、足元が真新しい黒ずすが飛んでいて、血と汗の混じった水溜りなような物ができていた。

現に、ダグラスの額には脂汗が浮かんでいて、息というよりも、うなり声のような呼吸を定期的に繰り返していた。拷問をしていた女兵の一人が少し脅えるような顔をしていたのも、少しわかるような気がした。まるで、ケダモノだった。

エレノア「私の声が聞こえるか」
ダグラス「……………ああ……………！」

声と言えないような返事をして、ダグラスは顔を少し上げてエレノアを見た。狂気と殺気を帯びたその目に、一瞬エレノアは顔をしかめたが、怯むまじとダグラスの両目をきつと睨みつけていた。エレノア「勘違いしているようだが、お前がこの場で拷問を受けているのは、地上やノアの情報を吐き出させるためではない。レクアお嬢様に暴力を振るい、サホリお嬢様のお顔に傷を付けた、その報い。腹いせというやつだ」

ダグラスは何も言わなかった。ただただ、唸り声のような呼吸を定期的に繰り返して、エレノアを呪い殺すような目で睨み続けていた。エレノアは小さく溜息をついた。

エレノア「お前にはわからないだろうが、女の世界は複雑怪奇でな。様々な意図、目論見を持った人間で溢れかえっている。だがその中でも、全ての女達に共通した認識が一つだけある。それは

「
ドスッ

…鈍い音がして、エレノアの拳がダグラスの腹にめり込んだ。

エレノア「……………男は全て、敵だということだ。お前はその、格好の象徴になったというわけだよ。愚かな男め」

ダグラス「……………くく、……………くくく……………は、っは、は……………」

くぐもったダグラスの笑い声は、狭い石造りの拷問室に低く響き、女兵達はその不気味さに身を震わせていた。エレノアだけは、キッ

とダグラスを睨みつけていた。

エレノア「…何がおかしい？」

ダグラス「……………笑っちゃまったただだよ……………ゲンゾウじいさんの金的に比べりゃ……………屁でもねーぜ……………てめえのへなちよこパンチなんざよ……………！」

エレノアはまた殴ろうとダグラスに近づこうとしたが、その瞬間にダグラスは反撃に唾を飛ばした。咄嗟に避けたエレノアだったが、間に合わずそれは鼻から頬にかけて、べちゃりと命中していた。

女兵「エレノア様！」

女兵「貴様あつ！ エレノア様になんてことを……！」

それまで様子を見ていた女兵達が、一斉に拷問具を手に取り、ダグラスを痛めつけ始めた。入口にいた女兵がタオルを持ってきてくれて、エレノアは顔についた唾を丁寧にふき取った。

女兵「大丈夫ですかエレノア様？ 黴菌がついているやもしれません、医務に見てもらった方がよいのでは」

エレノア「ああ……………お前達、そいつを殺すなよ。腹いせ程度にな」

エレノアは忌々しくダグラスを一瞥したが、もうダグラスの目にあのケダモノのような狂気は残っていないかった。

（拷問がさつきよりも感情的になっているな……）

エレノアは長い金髪を広げ、男女の叫び声が反響する拷問室を後にした。

拷問は、その後二時間に及んだと、報告書で目にした。

つづく……………

4・拷問（後書き）

次回の更新は、4月13日の予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5523j/>

さらば男ども【連載休止】

2010年10月9日00時58分発行